



地元の消防署の協力も得ながら、避難訓練に消火活動を取り入れるなどの工夫もしている

兵庫県の防災教育推進員がトルコで防災教育の模擬授業を実施



地震が起こったら…  
まずどうする!?

「机の下に隠れてくださいー!」  
小学生の時、担任の先生からそう言われて、机の下にもぐった経験はないだろうか。隣の席の子と顔を見合わせながら、ドキドキしながら次の指示を待つ。  
「速やかに廊下に並んで、校庭に出てください」

ボスボラス海峡…。トルコは日本人にとってなじみ深い国の一つ。そして、あまり知られていないが、日本とある共通点を持つ。それは「地震国」であるということだ。

3つの巨大プレートに挟まれているトルコは地震活動が活発。約2万人の犠牲者を出した1999年のトルコ北西部地震、日本人も犠牲となった2011年のトルコ東部地震など、この10数年だけ見ても、大規模な地震が頻発している。

自然の力は容赦ない。一瞬にして、私たちが築き上げてきたものを奪ってしまう。トルコ政府は国を、人々を守るため、地震に強い国づくりを目指し、建築物の耐震構造の強化に積極的に取り組んできた。

しかし、まだ何が足りない…。



指導案の一例。理科の授業では実験を通じて、洪水による浸食を防ぐ方法を学ぶ。身近なテーマと関連付けながら、防災の知識をしっかりと身に付ける



トルコ  
from TURKEY

# 子どもたちと共に 安全な国をつくる

日本と同様に地震が多い国として知られるトルコ。地震に強い国づくりのために必要なことは何か。トルコが力を入れるのは、未来を担う子どもたちへの防災教育だ。

非常階段が使えるのは、年数回のこの特別な日だけ。そう、日本人なら、誰もが経験したことがある避難訓練だ。

地震が起きたら、まずは机の下に隠れる。学校で学んだことは、大人になっても、自然と身に付いているから不思議だ。

しかし、この知識が、もしもの時に生死を分ける。学校での防災教育は、子どもたちを、コミュニ

ティーを守る大きな力を持っているのだ。備えあれば憂いなし。数多くの地震被害に苦しめられてきた日本は、防災教育を通じて、いざという時の備えを強化してきた。そしてそのノウハウが今、海を超えて世界へと渡っている。その一つが、アジアとヨーロッパの懸け橋として知られるトルコだ。

## 「コミュニティーを守る」 拠点は学校

いざという時に、自分の身を守ることのできる知識を広めたい。そこでたどり着いたのが「学校」での防災教育だった。「日本では避難場所に指定されていることから、学校はコミュニティーの拠点。地域に防災を広めるカギともいえます」。そう話すのは、OYOインターナショナル株式会社防災部のシヨウ智子さん。避難訓練も学校での防災教育の一環で、日本が最も力を入れてきた分野の一つ。世界でもその質はトップクラスだ。「防災教育の普及のために

力を貸してほしい」。日本の評判を耳にして、そうトルコ政府から依頼があったのだ。

トルコでも、これまで防災教育がなかったわけではない。99年の地震をきっかけに防災教育が大幅に見直され、05年にはカリキュラムも具体化された。さらに今、必要なのは公教育での普及と定着。そこで、国内で地震のリスクが一番高いとされる北西部のマラマラ地域を拠点に、指導案や学校防災計画などの作成、教員研修に取り組むことになった。

大切なのは、子どもたちが「楽しく」学べること。そのためには、教員も「楽しく」教えられる内容でなければならぬ。シヨウさんからは、現地の教育委員会の職員、大学教授などの有識者、教員と一つのテーブルを囲み、休日を返上し、指導案の内容について議論を重ねた。国語では作文を、算数では計算を、理科では実験を、音楽では歌を通じて、防災を学ぶための授業の実践例をつくり上げていった。

さらに、防災教育の最前線、日本の教育現場を見てもらおうと、今年1月にはトルコから数人の教員が来日。目的地は、阪神・淡路大震災を経験した神戸市。兵庫県教育委員会震災・学校支援チーム(EARTH)を中心に、防災教育に積極的に取り組んでいる自治



神戸でNPO法人プラス・アーツから学んだ「イザ!カエルキャラバン!」(左)を、トルコでは子どもたちの大好きな「クマ」を使った「クマキャラバン」にアレンジ



体だ。

神戸市の実践例の一つとして、トルコの教員たちの目を引いたのが「イザ!カエルキャラバン!」\*。05年に神戸で生まれ、大人から子どもまで、ゲーム感覚で楽しみながらしっかり学べる防災訓練だ。「興味を持って学べて、実践力をつけられていい」と共感。帰国後すぐに、トルコ風に「クマキャラバン」にアレンジして試験的に導入した。「これからも、県、市、大学の防災関係者、日本の専門家と連携し、防災教育の質を高めていきたい」と、現地の教員らは意気込む。

そしてこの夏、日本とトルコの努力の結晶である指導案が完成。今後は作成にかかわったメンバーが「先生」となり、各地で教員研修が実施される予定だ。これまではすべてトップダウンで決められてしまい、現場の声が全体の計画に反映される機会が少なかったトルコ。「現場にいる教員を指導案の作成に巻き込んだことで、本当に生徒のために必要な授業が実現しつつある。子どもたちの未来を守るためにベストを尽くしたい。彼らは、常にそう思っています」とシヨウさんは話す。学校を拠点に、地震に強い国を、コミュニティーをつくらせていく。トルコの教員たちの思いが形となった今、彼らは前へと進むのみだ。

\*神戸市のNPO法人プラス・アーツと美術家・藤浩志氏が共同で開発した防災訓練プログラム。おもちゃの物々交換プログラム「かえっこパズル」のシステムをベースに、ゲーム感覚で「消火」「救出」「救護」などが学べる構成になっている。